法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

戦争の記憶と死

井坂，義雄

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化．論文編 / 異文化．論文編
(巻 / Volume)
9
(開始ページ / Start Page)
7
(終了ページ / End Page)
24
(発行年 / Year)
2008-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003120

Hosei University Repository

戦争の記憶と死

Recollections of Wars and Dimensions of Death

井坂義雄

(1)

八月がめぐってくると、毎年のように戦争についての記憶が呼び覚まされ、原爆、空襲、戦場、引揚げ、残留、抑留、捕虜、戦犯等々が報道される。個々人にとっては、いまなお消えることのない戦争の結果が、あたかも国民総体として呼び覚まされるかのように報じられる。それは単なる繰り返しではなくて、新しい事実が付け加わることによって新しい展開もある。時の経過とともに新たな感情が生まれるかもしれない。いずれにしても、こうした報道は八月の盆の祭りと重なって、われわれを一種特有の感情に引きずりこむ。その感情とは過去であり、死であり、反省であり、再生であり、新たな決断であって、しかも、そのいずれでもないような心的状態である。

こうした説明のできないような心的状態にあって、ひとつ確かな感情が流れている。このままでは記憶が薄れていき、すべては忘れ去られてしまうのではないかという不安である。公式の記録があるので忘れ去られることはないと言われても、不安は消えない。戦争を経験した世代が高齢になっているだけではない。われわれは個々の体験が公

Hosei University Repository

式の記録を超越していると考えているし、またそう感じているからである。

そのように感じる背後には、個の体験は個を越えるもの、たとえば歴史や社会に押し流され、たしかな記録として、はたして公共の場所を与えられるのだろうかという疑念を払拭することができないという事実がある。耐えがたいと思われた経験は過去に遠ざかり、平準化され、薄められる。つらい記憶は、その激しさを個の内側に保ち続ける以上に効果的な方法を見つけることができないかもしれない。残酷な記憶を分かち合うはずの多くは死者となっている。

われわれは死者という。死者とはなにか。死者とは、なにも語ることのできない死そのもののはずである。死そのものの扱いをめぐって個は翻弄されるばかりである。すでに完成してしまった死を観想するのは生きる者であって、死者が観想するかどうかはわからない。死についての観想は生きる個のなかに展開され、生きる個のなかに蓄積される。完成してしまった死は、歴史の材料にはなるとしても、そのままでは生きる者と同等の公共の場所を与えられるという保障はない。それは捨てておかれるだけであるかもしれないのである。世界は生者のみが関与し、支配し、仕組みをあたえることのできる帝国と理解すべきではないだろうか。

生きる者が互いに分かち合う公共の場所があるとすれば、そこには人の集まりが構成する特定の文化構造と呼べるような何かがあるはずである。その文化構造というのは、つぎのような前提をもって理解することができるものでなければならないだろう。すなわち、人は生まれたときに、すでに与えられた特定の文化構造の中にいるということである。与えられている文化構造は、すでに与えられているという事実によって、変えることはできないものとして存在する。変えるためには構造の成り立っている規則を学び、変えるための手続きを踏まなければならない。

Hosei University Repository

出発の原点は主体と他者の関係である。この出発の原点は主体が他者を感じ、他者を認識し、やがては状況の認識一般にいたる道の始まりそのものである。ここには一本の道があるが、見かけよりははるかに複雑な個人形成の仕組みと社会形成の仕組みが、ときほぐすことを絶望的にしてしまうほど奇怪な形で入り組み、からみあっている。あまりに絶望的に入り組んでいるために、われわれは心理をあつかう分野と社会をあつかう分野という二つの領域に分けることによって、説明に必要な材料をまかなおうとするか、あるいは、まかなうことを避けているのではないだろうか。個人と社会の関係は、相互関係として理解されるべきものであるにもかかわらず、急激な社会の変貌によって、しばしば考察の領域から駆逐されようとさえしている。それだけではなくて、社会が個人に優先するという信念は、啓蒙思想に始まって、知識一般が普遍的に共有されるようになるにつれて、見えない掟として実質的に個人を管理することを許すようになっている。

最も価値ある知識は‥‥「科学」である。[1)]

知識の有用性を否定することはむずかしい。なにかしらの恩恵を受けていると感じているものを全面的に否定することはできない。否定にしろ肯定にしろ、それが生活の利便性と関係するとなると、にわかに知識と縁を切るというようなことは考えられない。われわれは生活のなかで、なにほどかの向上があることを期待し、よりよい生が実現するであろうことを願っている。われわれは向上を信頼し、進歩を信奉するようになっている。

相次ぐ分化の過程を経て単純なものから複雑なものへ向かう発達というのは、推理により溯ることの出来る宇宙の太古の変化にも、また帰納的に確証し得る変化にも等しく認められる。それは、地

Hosei University Repository

球の地質的気候的進化にも認められる。それは、地球上の一つ一つの有機体の展開にも、有機体の種類の増加にも認められる。それは、人類——教養ある個人であれ、人種の集合であれ——の進化のうちにも認められる。それは、社会の政治的、宗教的、および経済的体制という意味での社会的進化にも認められる。そしてそれは、日常生活の環境を構成する人間活動の有形無形の数限りない産物の進化にも認められるのである。科学が洞察(どうさつ)し得る最も遠い過去から昨日起こった新しい出来事に至るまで、進歩の本質は、同質が異質に変わって行くことである。[2)]

圧倒的な実行力をもって迫ってくる「科学」に、個人は公然と逆らうことはできない。個人は逆らうことをあきらめて魂を売り渡すか、あるいは、相対的に価値の少ない知識の世界、心理や芸術の世界に没入することになるだろう。個人は結果としては心理や芸術の世界に追いやられ、社会は個が作り出す心理や芸術を搾取し、再生産することまで引き受ける。個は社会を仲間や同士や尊者とみなし、闇の世界をすて、消費の世界に生きる価値を見い出すようになる。

個人を包み込む社会を、特定の概念規定に当てはめれば、[3)] 社会は意志をもつ共同体、いや、意志をもつということで言えば、社会は意志をもつ個として働くというべきである。

(2)

どのような思考も個から生まれる。いつか、どこかで共有される思考ということになれば哲学的思考というべきかもしれないが、思考であるかぎりでは、すべて個から出発する。集団が思考するというのであれば、それはあくまでも隠喩であって、事実を正確に言い表わして

Hosei University Repository

はいない。個の世界観はそのままでは、社会の視点からすると謎であり、ただ推測されるにすぎない。奇怪な犯罪が起こるたびごとに、社会はさまざまな分析を行ない、同じような犯罪の起こることを防ごうとするが、それで再発しない手段が保障されるわけではない。それに分析そのものは、個によって行なわれるのである。

> 適応の枠組みや、枠組みに正当性をあたえるそのときどきの社会秩序や価値観に問題はなかったのかどうか。それを問うことなく、現象的な不適応や逸脱だけを取りだして、病理だ、病気だと言い立てることそれ自体に学問的根拠があるのだろうか・・・・[4)]

社会は個から見れば他者であり、親密な関係として個の世界と重なることはないだろう。個の世界観は他者である社会に提示され、平面化され、文字化され、芸術化され、社会化され、共有化されて公共のものとなる。他者である社会は推測と類推によって個の世界を表象しようとし、じっさいに表象するだろう。個の世界観はいわば搾取される。個は犠牲者となるが、ひとたびこれに抗議しようとすれば、社会の本性である表象をもって、これを実行しなければならない。思考はすべて個から出発するが、思考の結果は特定の形をとって社会に反映され、やがて個にとって外圧として働くようになるかもしれない。しかし社会にとって個は闇につつまれた謎であり、個全体の隅々まで吸収しつくすことはできないだろう。社会はむしろ闇を駆逐するような明るい形象を提示して、個が社会になびくよう働きかける。

> すべての実験的発見物は、知覚的現在のなかに住まう。そしてそれらの発見物は、すべての理論の試金石である。知覚的現在における諸問題のまさに予見不可能な解決から、表現できない未来が咲き出る。[5)]

Hosei University Repository

誕生と死は個が与えられている思考空間の辺境をなしている。明るい未来を描き出すことができるとしても、生物としての思考空間が変わるわけではない。誕生については身近な他者、すなわち肉親を控えているので、おおよそ幸福な関係を保っていることが多いと考えていいし、かりに疑義があるとしても、有効な異議申し立ての手段があるわけではないので、やむなき辺境として過去に遠ざけられている。死の辺境はそのような無関心を許さない。死の辺境はつねに個の専有物として個につきまとい、一時的に忘れ去られることはあっても、永遠に離れ去ることはないだろう。

社会は、このような個に離れがたく所有されている辺境の死を理解しないし、また、しようとしても理解できない。理解しているように見えても、社会自らに付きまとうものとして死を見ることはできないし、感じることもできないだろう。なぜなら社会が死を見るのは個をつうじてであって、社会自体は社会そのものの死を見ることはないからである。社会が死を取り扱うときは結果だけである。社会が死を取り扱うことができるのは表象としての死であって、それ以上でも、それ以下でもない。社会は死を主観的に取り扱うことはできない。いちど死が発生しても、結果を処理するだけで、個の集団としての社会は死を見るのではなくて、生存者を見ようとする。なぜなら、異議の申し立ては生存者が行なうのみで、個から離れてしまった死はなにも言わないからである。それは生者が連想し、そっと、とどめておくべきものかもしれないのである。

> 親代々の古い體驗の上に積み上げられ、言葉や文字を以て教へ示さうとしなかった無形の慣例、中でも先祖に對する考へ方、殊に自分がよい先祖にならうといふ心掛のやうなことは、もともと死といふ聯想を誘ふものである故に、年寄などの前では口にせぬのを普

Hosei University Repository

通とし、從って段々形式ばかりのものになる傾きさへあった。[6)]

個人形成の仕組みがどのようであれ、個人形成は死をもって終了する。沈黙があると思うのは生者のもつ死者にたいする残像がそうさせるのであって、すべてはなくなるのである。形象を残すのは生者であり、個の集団としての社会である。

生と死が絶對の隔絶であることに變りは無くとも、是には距離と親しさといふ二つの點が、まだ勘定の中に入って居なかったやうで、少なくとも此方面の不安だけは、ほゞ完全に克服し得た時代が我々には有つたのである。それが色々の原因によつて、段々と高い垣根となり、之を乗り越すには強い意思と、深い感激との個人的なものを必要とすることになつたのは明白であるが、しかも親代々の習熟を重ねて、死は安しといふ比較の考へ方が、群の生活の中にはなほ傳はつて居た。信仰はたゞ個人の感得するものでは無くて、寧ろ多數の共同の事實だつたといふことを、今度の戦ほど痛切に證明したことは曾て無かつた。[7)]

死をどのように考えるかは「多數の共同の事實」であって、死者は自己の死を自ら主宰して取り扱うことはできない。死者は自己の死を自ら主宰して取り扱うことができるという幻想は豊かな表象を作り出しているので、このように厳密に線を引くことにとまどうかもしれないが、そのような幻想を生者が必要としていることは別として、死者は生者の世界から過ぎ去ってしまい、あとになにもないことに変わりはない。

このような線引きは、よくありがちな死と生の並列を無意味なものにし、生者の作り出す死の形象と表象に、いかに多くの情熱が注がれているかを知らせることになるだろう。その例を芸術一般に、文学に、

Hosei University Repository

物語に、伝説に、演劇に、風俗に見い出すのは容易である。形象と表象が豊かであるために、生者の辺境を死の辺境と取り違え、誤解してしまうとしても、それはじつは生者が作り出した幻想であることに変わりはない。このように作り出された幻想は、たとえ生者が作り出した幻想であるとしても、いわば社会化されることによって大きな意味をもつようになる。死は死者から切り離され、生者に所有され、社会に占有される。個の集団である社会は、社会自らの論理によって死を利用しつつ、個が社会に向けて準備を強いられる墓、祖先、化物、冥界、地獄、極楽などの観想を、神社仏閣、組織宗教、戦争、死刑、発掘等にまで推し進め、死を自由に取り扱うようになる。[8)]

（3）

この道徳［普遍的道徳］は、まず個人的道徳に始まり、次いで家族的、そして最終的に社会的道徳となるものである。[9)]

社会形成の仕組みがどのようなものであれ、社会形成は個がなければ成立しない。個のいない社会というのはありえない。個の重要性をないがしろにする社会があるとしても、社会のすべてが一つの個に還元されるならば、それはすでに社会とはいえない。もしあるとするならば、そこにあるのは一つの世界観だけであり、一つの死を待つだけである。そこには歴史すら存在しないだろう。社会は基本的には他者の集まりであり、すべての事柄は集まりの中でのみ相対的に意味をもつ。絶対的なものは個から発し、個に帰っていくので、社会は個が演じたり、作成したりする形象と表象をもって活動し、活動の根拠を個に求める。個は自ら滅びないためと、自らの繁栄のために個の集団である社会の求めに応答する。ここには馴れ合いの関係が成立するが、

Hosei University Repository

対等の関係というわけではない。もしも対等の関係であるとしたならば、社会は自らが成立しているはずの圧倒的な個の加算によって存在することができなくなるだろう。個は一つの構成員として社会に働きかけることはできるが、社会の働きかけにも応じなければならない。社会は個の集団という数の威力にかけて、一つ一つの個に強力に働きかける。それはむしろ強制といっていいほどである。社会は死の辺境をもつ個を理解しないし、また、理解しようとしてもできない。なぜなら社会は集団であって、集団は死の辺境をもつことができないし、個のもつ主観の世界、闇を擁するような孤独の世界を共有することはできないからである。社会は形象と表象をもってのみ個と接し、個に働きかけるのである。

> ‥‥この新しい清潔な町には霊園も墓場も火葬場もない。産婦人科医院も幼稚園も小学校もあって、人生のはじまりの施設はたくさんあるけれど、その終わりにかかわる施設がどこにもない。まるで死を隠蔽し、解離させ、忘れているかのように。
>
> 死。それからいま、私の首に巻きついている激しい攻撃性。悪。闇。そうしたすべてがここからかき消えている。しかし、それはある。みんなある。いまこのとき私を理不尽に殺そうとする邪悪な暴力となって、襲いかかっているように。[10)]

個の集まりである社会は、しばしばよく組織され、統率されて、あたかも機械が動くように作用するという本質をもっている。政治という概念が、社会に適用されるとき、概念にとどまらずに実行力をもつのはそのためである。

> これ［機械論的世界観］が一つの理論にすぎなくて、気に入ったら採用してもよいという時代があった。その時代には、これは殆ん

Hosei University Repository

ど悪魔と呼ぶこともできなかったろう。気に入らなければ、信ずることを拒否してもよかったのだ。しかし情勢は過去二百年の間にまるで一変してしまった。諸科学の進歩の結果として、それは気が向けば支持してもよい仮説ではなくて、好むと好まないとに拘わらず尊重しなくてはならぬ堅固な事実ということになった。それは私には、いずれにせよ、私個人としては、宇宙に対して十全な見解を得ようとするにあたって、他のすべてを蹴落してしまう唯一のものであるように思われる。[11)]

社会はまた歴史を味方にもっている。個を越えた集団の動きに関心が集まるときは、ひとは暗黙のうちに社会に時間的契機をあたえている。

いかなる国際政治の状況も時間に位置するものであるかぎり、それを理解するためには出来事の時間的継続に占める位置を知る必要があるから歴史の研究が必須なのである。[12)]

歴史は書かれないものにたいして書かれたものであり、幻想にたいして現実を示すものであるので、個にたいして強い言い分をもっている。社会は死を数え、これをわずかな数字の列に変えて言い表わすことができる。

これにたいして個が学ぶものは、社会が形象と表象をもって示す個の死であり、けっして集団としての死ではない。そこに示されるものは、死が取り持つ生の境界である。社会の視点からは謎であり他者である個の世界観は、この境界線上で社会固有の表象と一致する、あるいは交じり合うことができる。

「死んだ人間は、芝土の下にいるわけじゃない。‥‥だから、宝

Hosei University Repository

物の隠れてもいない場所に、印をつける必要もないんだ。忘れてしまうだって。とんでもない。むしろ、きちんと覚えているために、ぼくは彼らの脱ぎ捨てたものを忘れたい。それから死というものを、もっと真実に近い姿で捕らえるために、ぼくは墓を忘れたい」（ホーソーン「鑿で彫る」）[13]

個が社会と交じり合う接点として墓がある。墓は個が他者と感情を分かち合うために社会に提供する象徴であったものが、やがて死の象徴として意味をもつようになり、生者を支配する霊として働くようになったものである。死は社会性をもち、社会は死をつうじて個人に働きかける。社会は死を表象し、この表象をつうじて個人はひそかに社会から死の扱い方を学ぶのである。このようにして表象される死は、個人と社会を結ぶ、もっとも強い絆となる。「死は本来的に社会的な出来事である。どのような微小な個人の死であろうとも、そのことにかわりはない」[14]

生者を支配する霊としての死は、墓標をもって示される。墓と墓地は「穢」「禁忌」として嫌われることがあっただけではなくて、[15] また「死者の住処」[16]「死後の住居」[17] と考えられることもある。生活の場では墓標は神社仏閣であったり、墓地や墓石であったりするが、文芸と芸術一般、思想と宗教の場で広い空間を擁している。

（4）

「‥‥広島の人間は、死に直面するまで沈黙したがるのです。自分の生と死とを自分のものにしたい。‥‥わたしたちは八月六日を迎えることはできません。ただしずかに死者と一緒に八月六日をおくることのみできます‥‥」[18]

Hosei University Repository

なぜ人は死にこだわるのか。「あらゆる《空間恐怖》を撃退している‥‥現世人」[19] であるわれわれは、死というものにこだわらないのだろうか。もしこだわらないとすれば、どのような空間が起こりうるのか。もしこだわるとすれば、いつ、どのようにしてこだわるのか。このような問いをどんなに多く発してみても、有効な答えを導き出すことができるとは思われない。なぜならば、このような一連の問いは生全体に対応するからで、一つ一つの問いについて答えるとすれば、答えはばらばらになる。ばらばらの答えは答えを無効にする。

こだわることは、通常の意識の場が動くことであり、注意の焦点が移ることである。そして、これは執念とか妄想と呼ばれるような何かに取り憑かれた状態でなくても起こりうる。死にこだわることは、なにか特別な異常事態や狂乱状態を意味するわけではない。そのように思われがちなのは、死が生としての個の世界の辺境にあって、それ以外のなにものでもないからである。それは、近づくことはできるけれども絶対に同化することはできない性質のものだからである。死を表わす印は至る所にあるはずなのに、そこに死んだ人間はいない。死の数は公式文書の中に書き込まれているにもかかわらず、それは死そのものを意味していない。

それでも死にこだわるのは、生が破壊されるという現実を見ないではいられないからである。「展示をめぐる（昭和館・スミソニアン）抗争は政治的なものであったと同時に個人的なものでもあった。問題の核心には、他者の死をどのように理解すべきなのかという倫理的問いが横たわっている」[20] 生の破壊は戦争において頻発する。戦争による大量の死は、大量の生の死であるので、破壊される生が多ければ多いほど、死は多様に表象される。死にこだわる個は必ずしも死を表象するとはかぎらない。個は驚き、畏怖し、自らの行動を律しようとするだけかもしれないのである。個は驚き、畏怖し、自らの行動を律しようとするけれども、死そのものに向かって表象しようとはしない

Hosei University Repository

し、生ある自己に向かって表象しようとするときは、驚き、畏怖し、自らの行動を律することを了解したあとである。表象は他者に向けられる。表象は生ある他者のためになされる。他者の延長線上には「社会」が連なっている。「‥‥正義は、同一の時間を生きる人間間の連帯だけを念頭においているわけではなく、死者を含む過去との連帯・和解を促すものとして立ち現れている」[21)]

なぜ大量死が起こるのか。一つの死が他の死に連なっていることを知った個は、社会に説明を求めるだろう。社会は大量の生の破壊を説明しなければならないし、また説明する責任がある。説明は表象するだけにとどまらない。説明はなにもないはずの死をはるかに越えて、長い弔慰と物語と伝説を作り出す。それらを作り出す過程で、説明はまた、生を死に至らしめた理由をわずかな概念の組み立てによって構築する。「都市爆撃自体は当たり前の戦闘行為だとの戦争観が刷り込まれ、敵国中国に対する市街地爆撃を正当視する心理が形成される一方で、戦争の下での爆撃被害が自国に及ぶことについても、当然という意識が形成されていった」[22)]

説明はこれだけにとどまらない。社会は説明することによって社会形成の仕組みを変え、個人形成の仕組みに変更をくわえる。死へのこだわりは現実の生に影響し、不安と安定をもたらす。しかもなお、死そのものは死そのものを語るわけではないのである。すべてはこちら側にある生の世界での展開でしかありえない。しかも残酷なまでに、ときには論理的で、美的で、神秘的で、人工的である。なぜなら、死は目的のように結論づけられているが、語られる多くは死に至る過程であり道であるからである。個人の死は純粋に個人のものとして追想されるのではなくて、個の集合としての社会が組織する人間網の中の出来事として位置づけられ、整理され、公的な記録として後世に受け継がれていくという性質のものに変わっていく。死は人間から離れるが、死を観想するための材料全体は、人為的に組み立てられていく。

Hosei University Repository

人為的だからといって、つねに問題の中心に置かれるという保障はない。

> ‥‥私たちの注意は無数の方向に勝手気ままな線を引いている。私たちは自分の辿る線上にあるものなら何でも勘定に入れ、名前をつけるが、それ以外の事物や、自分が辿ったことのない線は、名前もつけられなければ、勘定にも入れられない。[23]

生の向こうに過ぎ去った死は、わずかに生の辺境に表象されるだけである。そして辺境から中心に引きずりだす必要がある場合には、メディアと芸術が介在する。「特攻戦死者の手記を読むことによって私たちがかきたてられる悲しみや怒りの感情は、手記の著者たちが自死という行動を強いられたばかりでなく、その死の意味づけという精神の活動までも強いられたことから引き起こされる」[24]「‥‥戦中派のなかには、‥‥戦争体験の語りがたさにこだわり、死者の美学化に徹底して抗おうとする者も多かった」[25]

そのようなことが起こる理由は、社会が一定の方向性をもっていることによる。方向性をもつことが社会の存在理由でもあるからだ。社会はいつも、じっとしてはいられない。いつもなにかをしなければならないと模索している。「かつての〈朝敵〉意識と同様に皇軍（天皇の軍隊）に抵抗する民族は、容赦なく〈征伐〉〈掃討〉して〈膺懲〉し、支配を受け入れないものは〈殲滅〉するだけである」[26] 社会は本質的に革命を恐れる。

> 「この国の言い伝えによると、共産党は政府を転覆しようとしていたということになる‥‥」[27]

社会はより有効な文化を学び、模倣し、自らの繁栄と安定を願望し、

Hosei University Repository

幸福を自負しながら、変化を是認する。個の集合としての社会は勝者と敗者を区別し、区別することを正当化しつつ個の破壊に理由づけを行なう。個の破壊を防ぐための配慮は、より大きな目的のために切り捨てられる。

（5）

語らない個としての死はありうるだろうか。それはありえない。なぜなら、語らない個としての死というのは、生者が記憶にとどめるものの残映であり、生者の作り出す表象にすぎないからである。生者は死の表象をもって、死を招かないための議論をしたり、やむなき死のための議論をするけれども、これらの議論に先行する感情があることは忘れられやすい。それは、社会が死をどう扱うかについての感情である。個は、死の形骸を見たり聞いたりしたときに、社会が死をどう扱うかを見きわめようとまで意識しないかもしれない。意識しようとしまいと、死が乱暴に扱われるか、それとも丁重に扱われるかを結果として見きわめることは個にとって深刻である。死は不条理にやってくるかもしれない。それが不条理かどうかを議論するのもまた生者の行為なのである。

戦争の記憶がどこに刻まれているかを考えることは、戦争資料の蓄積と場所、および感受性の蓄積と場所を考えることである。感受性がすべて場所をえて蓄積されているわけではない。起こった死のそばにいて、その死を目撃した感受性は、年が過ぎるとともに一つ二つと減少し、やがてはすべて消えてしまうだろう。知覚的現在は、消えてしまった感受性が記録したものを再生し、復活することができる。戦争資料の蓄積と、感受性の蓄積は、死そのものの蓄積ではないし、死のように語ることはできないが、何も語ることのない死に代わって社会

Hosei University Repository

に語ることのできる唯一の社会的共有物であり、戦争が後世に残した貴重な贈り物のはずである。死そのものは何も語らないが、いちど表出された死にたいする観想は、死そのものが語らないだけのものに相当し、生きるものが語る生の辺境として、つねに生を刺激しつづけるだろう。

「戦争中、作戦任務で戦場に向かうとき、われわれはよく靖国神社で再会することを約束し合いました。靖国で会おうと、われわれはいつも言ったものです」[28)]

これはしかし、あくまでも生者が生の世界を構造化しようとする一つの現われにすぎない。ここには生と死の無邪気な混同がある。生の世界の構造化については、生が続くかぎり、つねに新しい関心圏を更新していかなければならないし、またそれが生者のために生者自身に課せられた仕事ではないだろうか。

Hosei University Repository

注

1) ハーバート・スペンサー著、清水禮子訳「知識の価値—教育論第一部」清水幾太郎編『コント スペンサー』(世界の名著 36) 中央公論社、昭和 45 年、p.485.
2) ハーバート・スペンサー著、清水禮子訳「進歩について」前掲『コント スペンサー』p.420.
3) 多様な文化の概念を考察するために、私はつぎの拙文で「模型概念」の構築を試みた。「境界と辺境—ある模型概念の構築へ向けて」『異文化』 4、法政大学国際文化学部、2003 年。
4) 吉岡忍『M／世界の、憂鬱な先端』(文春文庫) 文藝春秋、2003 年、P.236.
5) G・H・ミード著、加藤一己、宝月誠編訳『プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房、2003 年、p.132.
6) 柳田國男「先祖の話」『定本柳田國男集第十巻』筑摩書房、昭和 57 年、PP.15-16. なお引用するにあたって、旧漢字体の一部を常用漢字体に、かな記号の一部をかな表記に変えた。
7) 前掲、柳田國男、PP.119-120.
8) 森謙二「明治初年の墓地及び埋葬に関する法制の展開—祖先祭祀との関連で」藤井正雄、義江彰夫、孝本貢編『家族と墓』早稲田大学出版部、2003 年、pp.197-229. 原田敬一「慰霊と追悼—戦争記念日から終戦記念日へ」倉沢愛子他編『岩波講座 アジア・太平洋戦争 2 戦争の政治学』岩波書店、2005 年、pp.291-316.
9) オーギュスト・コント著、霧生和夫訳「社会静学と社会動学《実証哲学講義》第四巻より」前掲『コント スペンサー』p.279.
10) 前掲、吉岡忍、P.598.
11) T. E. ヒューム著、長谷川鏡平訳『塹壕の思想』法政大学出版局、1968 年、p.93.
12) ヘドレイ・ブル「国際政治理論：一九一九－一九六九年の通観」猪口孝編『国際関係リーディングズ』東洋書林、2004 年、p.24.
13) "They are not under the sod....then why should I mark the spot where there is no treasure hidden! Forget them? No! But to remember them aright. I would forget what they have cast off. And to gain the truer conception of DEATH, I would forget the GRAVE!" —— Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales* (The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne Vol. IX), Ohio State Univ. Press, 1974, p.418.

Hosei University Repository

14) 内堀基光「死にゆくものへの儀礼」青木保他編「岩波講座 文化人類学 第9巻 儀礼とパフォーマンス」岩波書店、1997年、p.98.
15) 外池昇「幕末・明治期の陵墓」吉川弘文館、平成九年、pp.299-345.
16) 前掲、森謙二、p.212.
17) 中牧弘允「死後住宅としての墓」前掲「家族と墓」pp.282-284.
18) 大江健三郎「ヒロシマ・ノート」(岩波新書) 岩波書店、1969年、p.4.
19) ヴォリンゲル著、草薙正夫訳「抽象と感情移入 一東洋芸術と西洋芸術」(岩波文庫) 岩波書店、昭和38年、p.71. なお引用するにあたって、旧漢字体の一部を常用漢字体に変えた。
20) 米谷ジュリア「記憶装置としての博物館」前掲「岩波講座 アジア・太平洋戦争8 20世紀の中のアジア・太平洋戦争」2006年、p.273.
21) 阿部浩己「戦後責任と和解の模索一戦後補償裁判が映し出す地平」前掲「岩波講座 アジア・太平洋戦争8」p.359.
22) 伊香俊哉「戦略爆撃から原爆へ—拡大する<軍事目標主義>の虚妄」前掲「岩波講座 アジア・太平洋戦争5 戦場の諸相」2006年、p.287.
23) W・ジェイムズ著、桝田啓三郎訳「宗教的経験の諸相(下)」(岩波文庫) 岩波書店、1996年、p.272.
24) 中村秀之「特攻隊表象論」前掲「岩波講座 アジア・太平洋戦争5」p.303.
25) 福間良明「殉国と反逆—「特攻」の語りの戦後史」青弓社、2007年、p.106.
26) 笠原十九司「治安戦の思想と技術」前掲「岩波講座 アジア・太平洋戦争5」p.219.
27) カール・バーンスタイン著、奥平康弘訳「マッカーシー時代を生きた人たち—忠誠審査・父と母・ユダヤ人」日本評論社、1992年、p.98.
28) "We'd often promise each other to reunite at Yasukuni Shrine before heading out on a mission during the war. 'I'll see you at Yasukuni' is what we used to say,"... —— "Veteran navy officer keeps an open mind: On his Web site, all views are welcome about Japan's conduct in the war", *The Japan Times*, Oct. 5, 2007, p.3.